

さきほど読んでいただきました本日の使徒書は、使徒聖パウロがテモテに対する戒めを説いた個所が選ばれておりました。パウロにとってこのテモテは重要な存在でした。パウロは3回にわたり、地中海沿岸を中心とする各地に伝道旅行にでかけたことがあります。その第2回伝道旅行において、パウロはテモテの同行を希望しました。テモテはその後パウロの同行者としてしばしば使徒言行録に現われており、コリントの信徒への手紙2、テサロニケの信徒への手紙1・2、フィリピの信徒への手紙、フィレモンへの手紙の冒頭の挨拶に、テモテはパウロと共に名を連ねています。やがてパウロはテモテを高く評価し、教会の伝承によりますと、後にエフェソの主教になったとのことでした。

本日の個所でパウロはテモテに、聖書の有用性を語っております。聖書は、救いに至る知恵が書かれており、また有益な教えの書であるということです。さらに主なる神よりの戒めにより、誤りを正し、人間を正しく訓練する存在だと言っています。そして最後のところでイエスは生きている者と死んだ者との審判者であることが示されております。

さて、裁判官という仕事は大変難しいもののようです。起こった色々な問題を法律をあてはめて判決を言い渡すわけですが、公正を期すために日本では3回まで裁判を受けられることになっております。このように公正を求められる仕事でありますので、裁判官になるための試験はとても難しく、日本では近年の合格率が2%程だそうです。ただ、杓子定規に法律を当てはめればいいのではなく、このような立場の人が、特定の人にだけ益になる裁判をしたら大変なことです。本日の福音書は、そういう裁判官が登場しますが、これは一体何を教えているのでしょうか。

まず、これは私たちが祈るといことが例えられています。気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるためにと書かれておりです。

旧約聖書を読みますと、神様は悪を重ねる人間を見て大変心を痛められました。そういう人間を滅ぼしてしまおうと何回も思われたと記されております。しかしその度に預言者たちがとりなしの祈りをしました。どうか主よ、悪を重ねる人々に怒りを燃やさないでください。彼らはあなたの審きに耐えられる者でないのです。彼らに悔い改めを説き勧めますからとりなしを祈ったのです。

神様はそれを聞いて思い直されたと書かれております。預言者たちの熱心な祈りが、主の御心に響いたということなのです。

私たちは祈るとき、聞かれないかも知れないから無理だったときの準備をしてから祈ろうとすることはないでしょうか。祈りなど滅多に聞かれないものだと決め付けてはいないでしょうか。先日私たちは福音書を通して、信仰の力、信仰によって与えられる力はこの世の常識で計ることの出来ない、大きく、高く、広い力であることを学びました。私たちに聖ルカは、私たちには主の前に誇れるものは何もない、ただ主の前に御心のままに心を合わせて熱心に祈る大切さを言っているのです。私たちの祈りは実にそうあるべきなのです。二人または三人が私の名によって祈るならば私もその中にいるのであると主は言われました。私たちは心を合わせて神様の御心にかなうようにと祈ることが大切なのです。そして最後のところで示されていまして、最後に審きを行われるのは主なる神であり、主なる神は悪を決してお許しにならないことへの信頼が教えられています。

しかしここで大切なことがあります。それは私たちもよく知っておりますように、祈るならば、必ず聞かれるということではありません。この裁判官のように、悪いことでもしつこく頼めば聞いてくださるということはありません。それはやはり御心にかなっていないければなりません。私たちは熱心に祈らなければなりません、他だ自分に益となることを願うだけではなくて、最後に御心のままになりますようにと付け加えることが大切であります。祈りましょう。

主よ、私たちに熱心に祈る心を与えてください。そして私たちがいつも御心にかなう願いを求めることが出来ますよう、導いてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン